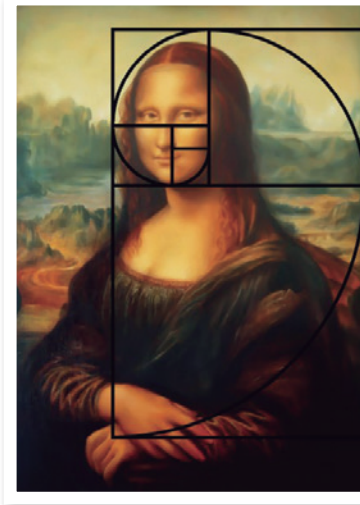




「黄金比の謎」を読んで

学校長 横山 豊

実は私は小さい頃から絵を描くのが好きで、高校1年生の時に美術部に入り、油彩に出会いました。レンブラントの人物画に魅せられて、高校2年生で自画像を描きました。またチョークで描かれたレオナルド・ダ・ビンチの素描の美しい線に憧れて、鉛筆デッサンで美しい線を描くことに夢中になったこともあります。絵画では、2次元の1枚の紙面に魔法のように立体的な3次元の世界が表現されるのです。



▲レオナルド・ダ・ビンチ作「モナ・リザ」における黄金比

その後、美術の教科書の中や国内外の美術館でたくさんの絵画を見ていくうちに、絵画の中に表現されたある種の「気持ち良さ」を感じるようになり、そうではないものを見ると何か「気持ち悪さ」を感じるようになりました。

昨年冬休みに、本校数学科の渡邊泰治先生が書かれた「黄金比の謎 美の法則を求

めて」を読ませていただきました。そして、この「気持ち良さ」の正体を見つけました。

先生は著書の中で次のように書かれています。

縦横の比が $1:1.6180339887\cdots$ である。黄金比をもつ長方形は、えもいわれぬ美しさ(ちょうどよさ)を醸しだす。しかし黄金比は「中途半端」な数である。「中途半端」な数が「ちょうどよい」感覚をもたらすのはなぜか。本書は、「ちょうどよさ」「中途半端さ」をキーワードに、自然界、人の感覚、数学を黄金比で結びつけ、そこに美の法則をさぐるという試みである。謎めいた黄金比の美しさに、数学の光をあてると何がみえてくるのだろうか？

私は典型的な文系の人間で数学は本当に苦手なのですが、先生のこの本を読ませていただき、長年感じてきた「気持ち良さ」の正体が黄金比に裏打ちされた「ちょうど良さ」であり、論理的な美しさでもあると知り、とても感動しました。高校時代に先生の本を読んでいたかもしれません。物事には必ず理由があります。美しさを証明してくれる数学という学問は、本当に素晴らしい学問ですね。

最後に、先生の著書である「黄金比の謎」は本和館にも何冊かありますので、是非皆さんもこの冬休みに読んでみてください。絵の見方が変わることを請け合いですよ。

